

古川雄嗣先生のご講演に対するコメント 九鬼周造の時間論における二重構造への問い

舞鶴工業高等専門学校 山根 秀介

古川先生のご講演、非常に興味深く拝聴しました。九鬼が見ると無味乾燥にも思えるような厳密で学術的な哲学研究というスタイルをとりながらも、その実、彼自身の人生における諸問題と格闘しつつのつびきならない状況で思索していたことが鮮やかに示されていたように思います。実際、九鬼は「偶然性の問題」で当時の新聞記事から多くの実例を引きつつ「偶然」という問題について考察していますし、また「秋の一日」という詩のなかで「形而上学のない哲学は寂しい、／人間の存在や死を問題とする形而上学が欲しい」（一・二二八―二二九頁）と歌っています。このように、人間という存在者の「具体性」とでも呼ぶべきものを重んじる九鬼は、まさにアンリ・ベルクソンやマルティン・ハイデガー、ジャン・ヴァールが活躍した二〇世紀前半のヨーロッパから多くを学んだ哲学者であるとい

うことを改めて認識させられました。先生はさらに九鬼が哲学者として「偶然性と必然性」という問題に対していかに挑んだかを簡潔に解説された上で、現代日本の二つの不幸な事件を例に挙げてそれらを九鬼哲学の視点から捉え直し、その普遍的な意義を取り出そうとされました。

このような先生のご講演の後でやや専門的な話をするのを許していただきたく思います。私がここで取り上げたい論点は、九鬼の哲学において「偶然性」がもつ「現在」もしくは「いま」という時間の本性と、そこにおいてその都度湧出する（はずであるように思われる）「新しさ」の問題です。これらは今回のご講演では時間の都合上、また議論が過度に専門性に傾くことを避けるためにあえて触れられなかった話題だと推察しますが、私自身の関心からこの点について議論させていただければ幸いに存じます。

先生は九鬼哲学における「運命」という概念についてお話しされました。それはある種の「生き方」の問題、私たちの実践に関わる概念であり、「その都度の瞬間に偶然として与えられる現実を、人間が時間の地平において必然化することによって、はじめて成り立つもの」（傍点引用者）であるとされました。つまり「運命」とは、「必然か偶然か」という二者択一的な対立関係において捉えられるべきものではなく、人間が意志と行

為によって偶然的なものを必然的なものとすることで生じる事態だということだ。

私がここで特に注目したいのは、この「時間の地平において」という箇所です。こうした「偶然—必然—運命」論と密接に結びつく議論として、九鬼の「円環的回帰的時間」という独自の時間論があります。これは一九二八年にパリ近郊のボンティニーで行われた講演をもとにした「時間の観念と東洋における時間の反復」という論文において主に展開されています。この考えは非常に魅力的であると同時にまた私にとって極めて難解なもので、容易に概略を述べることができません。それは「繰り返す時間、周期的な時間」（一・四〇〇頁）、「無際限の再生、意志の永遠の反復、時間の終りなき回帰」（一・四〇一〜四〇二頁）、「直線ではなく円として解される」（一・四〇三〜四〇四頁）時間などと表現され、過去・現在・未来と直線的に考えられる通常の時間概念に対して、「東洋的」な時間観念として提示されています（もつとも、この「東洋的」な時間こそが真の時間であると九鬼が主張していると考えるのは適切ではないように思えます。そうではなく、時間をもつ二重の性格の一方がこの「円環的回帰的時間」であると捉えるべきでしょう）。

ここでは、円として表象されるような同一の「大宇宙年」という周期が永遠に無限に反復されるような時間観念が考えられています。これがいわゆる「直線の時間」とは異なり、その円

環的構造によって可逆的な性質を備えているということ、またこれが螺旋的に旋回しつつ「上昇」していくのではなく、あくまで細部にわたって全く同一の「大宇宙年」を繰り返すものだということが重要な点であるように思われます。実在のあり方を時間的に捉えようとし、時間の不可逆性から諸瞬間の絶対的な「新しさ」を導出しようとしたベルクソン、ウィリアム・ジェイムズ、ヴァールは、九鬼と同じく「具体的なもの」に寄り添おうとした同時代の哲学者ですが、この点において九鬼とは袂を分かつように見えます。

私が問題にしたいのはまさにここです。「偶然性は現実の一点に脆くも尖端的存在を繋ぐだけであるが、実在の生産原理として全生産活動を担うの情熱を有つたものである」（二・一八七頁）と強い言葉で述べられているように、一方で九鬼は、「現在」において、「現在」においてのみ生起し与えられる「偶然」が世界を形成し動かしていくものであると考えています。それは実在の「再生」ではなく「生産」なのですから、ここには何か新しいもの、これまでには存在していなかったもの、予測不可能なものが生じているように思われます。他方で、彼は「円環的回帰的時間」によって、同一の出来事が全く同じように反復されるということを考えました。ここで一切はすでに過去に起こったこと、未来に何度でも生じることなのですから、

「現在」は「新しさ」の湧出点という特権的な意味をもたないようにも見えます。このように考えてみると、「まさにいま」が生み出す「新しさ」とはいったい何を意味するのでしょうか。古川先生もまた論文や著書でこの論点に着目しておられます。先生は「円環的回帰的時間においては、すべての瞬間に「死と再生」が、時間の「絶対的更新」がある」（『偶然と運命 九鬼周造の倫理学』、ナカニシヤ出版、二〇一五年、五九頁）と書かれています。

しかしながら、私はまだ時間のこうした二重のあり方を十分に理解できていません。なぜこのようなことが可能であると九鬼は考えたのでしょうか。もちろん私は、このような九鬼の議論が矛盾しているものであると言いたいわけではありません。九鬼のような優れた哲学者がこの問題に気づいていなかったなどということはありえない。彼は自覚的にこうした二重性を提示したに違いないのです。したがって私は、私たち人間はどのようにしてその二重構造を生きていることができるのか、それがたとえば先生がご講演で挙げられたような悲劇（この表現は非常に示唆的です。大仰に言えば、「劇」とはその時その場でのみ生じる「示現」であると同時に、繰り返し演じられることを前提とする「再現」であるとも言えるでしょう）において、また人間が生きていく上で、いかなる意味をもちうるのかという問いをここで提示します。思わず目をそむけたくなるような、二

度と繰り返ししてほしくないような出来事、そしてその悲惨を「運命」として受け入れることを選んだ人々。九鬼のテキストを読むことによつて、こうした場面において何を言い、何をもたらすことができるのでしょうか。「新しさ」と「反復」、「創造」と「回帰」が奇妙に溶け合い混じり合うまさにこの点に、九鬼の時間論の実存的な核心が存しているように思われます。

記念講演会

「第一回九鬼周造記念講演会」

二〇一九年七月一二日

於・甲南大学

○司会 少し雨の降るなか、多数の皆様にお越しいただきまして、ありがとうございます。

本日のプログラムは配付しておりますそちらのスケジュール表どおりで進めてまいります。

まず最初に、今回主催であります人間科学研究所の所長の森先生から、九鬼周造と甲南大学はどういうかわりがあることなどをご紹介します。そのあと、古川先生にご講演を